

聖書に学ぶ

—— 旧約聖書の歴史観 特にいわゆる「申命記史書」を中心に ——

山 我 哲 雄

1. はじめに

北星学園大学の山我と申します。専門は旧約聖書研究で、現在、日本旧約学会というものの会長を務めております。もう 20 年くらい前から、藤女子大に非常勤講師としてお呼びいただいております、実は昨日もここで授業をやったところでございます。大学も教会もプロテスタントなのですが、学問的にはそんなことは関係ない、ということでしょう。カトリックの太っ腹さを感じて感謝しています。まあ、旧約聖書はカトリックもプロテスタントもなかったころのものでありますから、教派的な立場が問題になることもあまりないことは事実です。しかも、今回は藤女子大の顔とも言うべきこの公開講演会に講師でお呼びいただいたということは、たいへん名誉なことでございます。

今日のテーマは、少しかたい題名になりましたけれども、「旧約聖書の歴史観」とし、「特にいわゆる『申命記史書』を中心に」という副題をつけました。

この申命記史書とは何か、というような話から始めなければならないと思います。簡単に言ってしまうと、旧約聖書にある、『ヨシュア記』、『士師記』、『サムエル記（上下）』、『列王記（上下）』のことで、——これらは内容的にも繋がっているわけですが——これらの歴史書全体を、聖書学のほうでは、後でも詳しく説明しますように、『申命記』という文書の思想や用語法の強い影響を受けているということで、「申命記史書」と呼ぶわけです。そしてその申命記というのは、ご存知のように旧約聖書の五番目の書物、モーセの告別説教の形をとった書物であります。

今日はその「申命記史書」についてお話をしたいと思います。といいましますのも、これは私がずっとやってきた研究テーマでもありますし、また世界的な旧約学研究で、今いちばん重視されている領域の一つがこの申命記主義だからなのです。申命記に連なる、その影響を受けた思想が、旧約聖書の中で、従来考えられていた以上に広い、大きな部分を占めているということが、だんだん明らかになってきている、ということでございます。

歴史書としての旧約聖書

さて、あまり旧約聖書を読んだことがない方に、「旧約聖書って何が書いてあるの？」と聞かれたとします。いろいろ答えに困るわけですが、差し当たり、当たらずといえども遠からずと言えらると思うのは、「旧約聖書には古代イスラエル民族の歴史が書かれている」、ということです。そういうふうに答えておくと、それほど的外れではないと思います。

ご存知のように、旧約聖書はまず天地創造から始まりますけれども、創世記の12章からは既に、イスラエル民族の祖であるアブラハムが登場し、そしてそのアブラハムの子孫たちがエジプトに下り、そこで苦難を受け、モーセとともに脱出し、カナン之地までやってくる。これが最初の「モーセ五書」の主たる内容で、原初のイスラエル民族の起源とも言えるべき歴史を描いているわけです。

そして、それに続くヨシュア記に入りますと、イスラエルがヨシュアの指揮のもとでカナン之地を征服する。そしてカナン之地に定着しますが、周りの民族がさかんに攻め込んできますので、「士師」と呼ばれる指導者たちを中心にそれと戦う。これが士師記の主たる内容です。サムエル記では、預言者サムエルとサウル、ダビデのもとで、イスラエルに王政が導入されます。そして列王記に入りまして、ダビデの息子ソロモンのもとで一時は王国として栄えるのですが、ソロモンの死後、国は北と南に分裂します。そして先に北王国イスラエルがアッシリアにより前8世紀の終わりに滅ぼされ、そして最後には、かろうじて生き残っていた南のユダ王国も、前6世紀の初めにバビロニアによって滅ぼされてしま

う。このように、旧約聖書の最初の部分には、イスラエルの太古の歴史が綿々となつづられているわけです。それ以外にも、旧約聖書には、『歴代誌(上下)』や、もっと後の時代を扱う『エズラ記』、『ネヘミヤ記』といった歴史書や、『ルツ記』、『エステル記』などの歴史物語が多く含まれています。

それから、旧約聖書には預言書もたくさんありますが、預言者たちも、まさにアッシリアの侵攻、あるいはバビロニアの支配、というような過酷な歴史的状況の中で、その歴史にどういう意味があるのかを語った。つまり、それは罪を犯したイスラエルに対する神の裁きなのだ、と。預言者は未来の出来事について語るわけですから、それは、将来の歴史について語るものだと見ることができる。こういう風に見れば、旧約聖書の大部分がイスラエル民族の歴史に関わると言ってもよろしいかと思います。

さて、ここに旧約聖書の思想の特色があるわけです。旧約聖書を生んだ古代イスラエル人は、自分たちの歴史の中に、彼らの神ヤハウェの意志と働きを見たのです。ご存知のように、旧約聖書では偶像崇拜が禁じられています。ですから、ヤハウェという神の姿を描いたりすることはできません。また、神の姿を見れば死んでしまう、みたいなことも、いろいろな箇所ですべて前提にされています。有名な場面では、イザヤが召命のときに神殿で神の姿を幻で見て、驚きのあまり死にそんな思いをした、そして畏れた、という場面があります(イザ6:1-5)。

それでは、そのような姿のない神、あるいは姿を描いてはいけない神を信じたイスラエル人にとって、ヤハウェという神は抽象的で遠い存在だったかということ、決してそうではない。むしろイスラエル人は、極めてリアルに、ヤハウェという神の存在、そしてその働きを感じていたと思います。それでは、その姿の見えない神をどこに感じたかということ、彼らは自分たちの体験する歴史の動きの中に、自分たちの神ヤハウェの意志と、その働きを見た、ということなのです。旧約聖書の神はイスラエルの歴史を導き、その中に自己を啓示する歴史の神である、そういう風に言っても過言ではないと思います。

旧約聖書では、神の救いも裁きも、この世界の歴史の中で実現するわけです。宗教というと、一般的には、人間の死んだ後の来世に天国や地

獄とかを考えるわけで、キリスト教の中でも後にそういう思想が出てきますが、少なくとも旧約聖書の場合には、そういう発想自体がない。ごく後期（前2世紀頃）の、いちばん最後の段階に書かれた黙示文学（『ダニエル書』など）になると、この世は一度終わっちゃって死者が復活するっていうわけですから、そういう意味では来世的な考え方が出てきますが、それを除けば、旧約聖書のほとんどの部分では、決して歴史的世界を離れた来世や彼岸で、神の救いや裁きが問題になるのではない。そういう意味では、旧約聖書には天国も地獄もないわけです。むしろ、イスラエル人自身が体験する歴史の世界が、天国になりもすれば地獄になりもする、ということなのです。

申命記史書とは何か

さて、旧約聖書の歴史書中、主要な部分をなしますが、先ほど挙げたヨシュア記、士師記、サムエル記（上下）、そして列王記（上下）です。前にも述べましたように、旧約聖書研究では、これらを全部まとめて、申命記史書という名前で呼ぶわけです。

実はこれらの歴史書は、単に中身において繋がっているだけではなく、文書としても一続きの統一体をなしている。おそらく同じ人々が書いた長大な歴史書なのです。古代世界においては書物というのは、紙を綴じたものではありませんでした。綴じた形のものを「コーデックス」、「綴じ本」というのですが、書物がこういう形になるのはギリシア・ローマ時代、つまり紀元前後なのですね。それ以前は、ユダヤで書物といえば巻物でした。羊皮紙や、あるいはパピルスなどを巻いて作るわけです。したがって、一定の量しか一つの巻物に収録できないわけです。あんまり長いものと、重くなるし、ぐるぐる回して必要な箇所を出すのに、扱いに困ってしまいます。

モーセ五書もそうなのです。実は、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記のモーセ五書は、中身は全部繋がっているわけで、ただ、余りに長くなったので、五つの巻物に分けた。そういうことで、「五書」といって、その区分のほうが後からできたわけです。

申命記史書の場合もそうでして、巻物にする際に、ヨシュア記、士師

記、に分け、サムエル記と列王記はそれでも長すぎるのでさらにそれぞれ上下に分けた、というわけで、この分けた姿のほうが二次的であって、中身は一続きのものなのです。

そしてその内容を見ますと、実は申命記に非常に近い用語法や考え方が歴史書全体を一貫している。つまり、申命記の思想から歴史が記述されている。そこで「申命記史書」と呼ぶわけです。申命記の思想や文体、用語法に影響を受けた歴史書、という意味です。

これらの書物が、同じ人々によって、単一の、一続きの歴史書として書かれたということの、一つの例として示したいのですが、ヨシュア記にエリコの町の征服の場面があります。有名な物語なのでご存知の方も多いと思います。イスラエルがカナンを征服しようとしたとき、エリコというカナンの町はたいへん強大な城壁に囲まれていて、人間の力では崩せそうもなかった。ところが神が征服の指導者ヨシュアに命じて、契約の箱という、十戒の石の板二枚を収めた箱をお神輿みたいにかついで、七回まわって鬨の声を上げさせると、ガラガラッとひとりでにその城壁が崩れて、そこを簡単に征服できたというのです。アメリカの黒人霊歌の「ジェリコの戦い」という歌でも有名です。その最後に、こういう場面があるのです。エリコを滅ぼしたヨシュアが、呪いをかけた。「このエリコの町を再建しようとする者は主の呪いを受ける。基礎を据えたときに長子を失い、城門を建てたときに末子を失う」(ヨシュ 6:26)。こうして、誰もこのエリコを二度と建てなおせないようにした、というわけです。

この呪いが実現する場面が、列王記上 16 章に描かれています。アハブというイスラエルの王様の時代に、ある人物がエリコの町を建て直したというのですね。「彼の治世に、ベテルの人ヒエルはエリコを再建した。するとかつて主がヌンの子ヨシュアを通してお告げになった御言葉のとおり、その基礎を据えたときに長子アビラムを失い、扉を取り付けたときに末子セグブを失った」(王上 16:34)。つまりヨシュア記で予告された預言が、ずっと後ろの列王記で成就する。つまりヨシュア記と列王記で、中身がつながっているわけです。このことから明らかなように、一連の歴史書であるヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記は、別の人々によってバラバラに書かれたわけではなく、単一の一続きの歴史書

として書かれた。しかもそれらは、申命記の用語や精神に、強い影響を受けて書かれている。そういうわけで、申命記の思想や文体、用語法に影響された歴史書、という意味で、申命記史書と呼ばれているわけです。英語で言う場合は、申命記は Deuteronomy ですから、Deuteronomistic History と言います。

申命記とは何か

それでは次に、その申命記とは何か。間違えないでくださいね。「申命記」といったら、モーセ五書のいちばん最後の文書。「申命記史書」といったら、それに続く歴史書なので、あくまで別のものです。ただ、前者から後者が強く影響を受けている、ということなのです。

さて、申命記とは何か、ということなのですが、申命記は形式的に言えば、先にも言ったように、旧約聖書の冒頭の「モーセ五書」と呼ばれる一続きの文書の第五書であり、その締め括りをなしています。モーセ五書は、ヘブライ語では「トーラー」と呼ばれます。トーラーというのは「律法」という意味ですが、実はここでも歴史物語が語られているわけです。先にも見ましたように、五書には、天地創造に始まり、イスラエル民族の出エジプトからカナンへの地にやってくるまでの歴史が描かれている。その途中で、シナイ山で神との契約が結ばれ、律法が与えられる。その律法が出エジプト記後半からレビ記全体を通り越して民数記の途中まで、五書全体の中核部分をなすので、ユダヤ教ではこのモーセ五書全体を「トーラー」、すなわち律法とよぶわけです。

さて申命記ですが、形式的には、カナン侵入直前のモーセの告別説教ということになっています。エジプトから出て、40年間旅をしたわけですよ。本当は、パレスチナからエジプトまでは、直線距離で200キロか300キロですから、10日もあれば充分到着できる距離なのです。何故それが40年間もかかったかといいますと、ご存知の方も多いと思いますが、途中でイスラエルの民が、砂漠で水もないし食べ物もなくて、パレスチナに向かう旅が嫌になってしまうのです。エジプトに帰りたい、なんて言い出しましたので、ヤハウェは怒りまして——旧約聖書のヤハウェは非常に怒りっぽい神様に描かれているのですが——、そういう不

心得な世代はみんな砂漠で死ぬがよい、お前達の子孫の世代にならなければカナン之地に入らせないと、言った。そのために、その世代は全部、ヨシュアとカレブという、不満を言わなかった二人の例外を除いて全て、40年間の間に次の世代に変わる。そういう、荒野放浪40年というのがあるのです（民14：26-35）。

その40年目になってようやく、ヨルダン川のほとりまでやって来る。この川を渡ればこのカナン之地です。しかしモーセ自身も、神に逆らった古い世代のリーダーとして、お前はカナン之地には入ってはならない、と神に命じられるわけです。そこでモーセは、ヨルダン川のほとりで人々に説教をする。別れの説教です。そういうわけで、申命記はモーセのイスラエルの人々に対する告別の挨拶から始まるわけです。「モーセはイスラエルのすべての人にこれらの言葉を告げた」（申1：1）、「モーセは、ヨルダン川の東側にあるモアブ地方で、この律法の説き明かしに当たった」（申1：4）。そして申命記の最後は、このモーセが死ぬ場面で終わります。つまり彼は、カナン之地に入ることを禁じられた。しかし神は最後に彼に、新世代のイスラエルがヨルダン川を渡ってカナン之地に渡って行く場面を、山の上から見ることが許す。「主はモーセに言われた。『これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見えるようにした。あなたはしかし、そこに渡って行くことはできない』。主の僕モーセは、主の命令によってモアブの地で死んだ」（申34：4-5）。

ですから、この間に語られるモーセの最後の説教が申命記の内容ということになります。そこではモーセが出エジプト、あるいは神との契約を中心とするこれまでの出来事を回顧しつつ、法——申命記律法（申12-26章）ですが——を提示し、カナン之地においてこれを守っていくように、勧告するわけです。これまでを振り返りつつ、神の戒めについて解説をする。

例えば申命記五章では、有名なあの十戒が回顧される。「イスラエルよ、聞け。今日、わたしは掟と法を語り聞かせる。あなたたちはこれを学び、忠実に守りなさい。我々の神、主は、ホレブで我々と契約を結ばれた」（申5：1-2）。

出エジプト記では神との契約の山の名前がシナイになっているのです

けれども、申命記では何故かホレブになっていて、いろいろ議論があるところですが。この問題に立ち入るとこれだけで一時間くらいかかってしまいますので、今日はこのホレブの名前については詳しい説明をしません、まあシナイの別名と考えていただいいてよいと思います。

「主はこの契約を我々の先祖と結ばれたのではなく、今ここに生きている我々すべてと結ばれたのである」(申5:3)。そして、「わたしをおいてほかにいかなる神もあつてはならない。いかなる像もつくつてはならない……殺してはならない、姦淫してはならない、盗んではならない……」という有名な十戒も回顧される(申5:6-21)。そして律法を行って忠実に生きようと、いわば説教がなされるわけです。

例えば、「今日、わたしが命じる戒めをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたたちは命を得、その数は増え、主が先祖に誓われた土地に入って、それを取ることができる。あなたの神、主が導かれたこの40年の荒れ野の旅を思い起こしなさい」とある(申8:1-2)。さて、そのすぐ後に、すごく有名な言葉がありますよね。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」(申8:3)。これは、悪魔の誘惑のときにイエスが言った言葉として有名ですが(マタ4:4)、実は、申命記のこの箇所からの引用なのです。新約聖書に一番引用されている旧約聖書の文書は、詩編とこの申命記なのです。そういう意味でもたいへん重要な箇所であります。

申命記の成立

さて、このように申命記は、モーセの告別説教という形式をとっております。しかし、学問的にこの申命記を分析してみますと、文体的にはそれほど古いものとは思われない。ましてやモーセ時代のものとは、実は考えられないのです。旧約聖書ではこういう現象がよく見られます。旧約聖書はほとんどがヘブライ語で書かれているのですが、専門家の分析によれば、その文体によってだいたいの年代が推測できます。旧約聖書は39冊もありますから、それぞれにかなりの書かれた時代のばらつきがある。古いものから新しいものまで、千年近くの幅があると言われております。まあ千年は大きすぎるとしても、800年ぐらいの幅はあると言

われています。

例えば日本語で、一つは村上春樹、一つは夏目漱石、一つは江戸時代の近松門左衛門、一つは平安時代の枕草子や源氏物語の文章の一部を、作者も題名も上げずに、四つのカードにして、ごちゃごちゃにして、年代順に並べてごらん、といった場合に、よほど古文のできない人でなければ、一応ちゃんと並べられると思うのですよね。やはり現代の村上春樹の文体と、百年以上前の夏目漱石の文体は、同じ日本語であっても、一見して明らかに違うわけです。ましてや江戸時代や平安時代となれば、その区別は容易につくわけですね。旧約聖書でもそうできて、ヘブライ語の専門家が見ると、それがかなり古いものであるか、あるいはかなり後のものであるかということが分かるわけです。

申命記を見ますと、これは文体的には王国時代末期のもの、年代的に言えば紀元前7世紀から6世紀にかけてのものと考えられるのです。そこで実は申命記という文書は、この時代の著者たちが——おそらく一人ではないだろう、大勢で書かれた学派的文書だろうと言われているのですが——彼らがモーセの口を借りて、ヤハウェへの正しい信仰の在り方と、申命記法に従う生活を宣教している、という風に旧約研究では考えられています。モーセの権威と口を借りて、自分たちの思想や信仰を語っている、というわけです。

さて、申命記の中心部分は、申命記法（申12-26章）といって、あれをしてはいけない、これをしなきゃいけない、という法がびっしりと並んでいるわけですが、法文書として見た場合の申命記法は、出エジプト記の中にある、より古い法伝承を改訂して、王国時代後半の状況に適合させようとしているものと考えられます。

例えば出エジプト記の21章から23章に——これは十戒のすぐ後ですが——一般的に「契約の書」と呼ばれている法文集があります。あるいは、出エジプト記34章にも、「祭儀的十戒」というのがある。先ほど紹介した、「他の神を拝んではならない、殺してはならない、姦淫してはならない、盗んではならない……」という道徳的な命令を含む、あの有名な十戒（出20：1-17＝申5：6-21）の方を「倫理的十戒」というのに対して、出エジプト記34章の方は、同じく「十の言葉」とされながらも、こういうお祭りを行いなさい、こういう儀式を行いなさいという祭儀に

ついてばかり述べているので、「祭儀的十戒」と呼ばれています。

これはいずれもかなり古い、王国時代以前か王国時代初頭のもと言われていますが、申命記には例えば、王様というものはこう振る舞わなければならない、という規定があるのです。その規定は、当然ながら王国が成立して、王というものが支配する段階に入ってから作られたものだろうと考えられます。それが、モーセ時代にまで遡られているわけで、申命記は、いわば古い法的伝承を王国時代後期の状況に合わせてニューバージョンにしたものであると、一般的に考えられています。ただ今回は、個々の法を扱うことはいたしません。

申命記の中心思想(1) 一つの神

申命記を全体として見た場合、その思想は「一つの神、一つの民、一つの聖所」という理念に要約できます。

一つの神とは何か。言うまでもなく、これはヤハウェです。申命記は、言ってみれば、ヤハウェのみを礼拝するという、ヤハウェ一神教を徹底させようとしている書物である、と言えるだろうと思います。では、何故そんなことが問題となるのか。古い十戒の中でも、「他の神を拝んではならない」という、一神崇拜の原則はすでに確立していたのではないのか。もちろん、ある程度はそうなのです。しかし実は、後で見ますように、王国時代後半になりますと、イスラエルでもユダでも不敬虔な王がたくさん出まして、王が率先して他の神々を拝んだり、あるいは偶像を造ったりして、その一神教のありかたが非常に乱れた時期があったのです。つまりここでは、王国時代の後半に、異教的なものが受容され、宗教混淆的な状況が現出していることが暗に前提とされており、その肅正が求められているのです。

この、ヤハウェが一つであるということを再確認するということ、これを典型的に示しますのが、申命記の中でも一番有名な語句の一つ、申命記6章4節の「シェマーの祈り」なのです。

「聞け、イスラエルよ」。この「聞け」という言葉は、ヘブライ語で「シェマー」と申します。そこでこの部分を、「シェマーの祈り」といいます。ユダヤ人には、一日二回お祈りの時間があります。イスラム教徒は五回

もお祈りするのですが、ユダヤ人の場合でも、朝と夕方に二回お祈りの時間があって、そのとき最初にこれを唱えます。「シエマー・イスラエル、アドナイ・エロヘヌー……」と、始まるわけです。

「聞け、イスラエルよ。わたしたちの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」。これも言うまでもなく、イエスの引用で有名ですね。イエスがユダヤ人のファリサイ派の律法学者に、一番大切な掟は何かと聞かれたときに、まっさきに二つ答える。その一番目がこれです。「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」。もう一つ、第二番目の掟として挙げるのが、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」。(マタ 22：34-40) ちょっとこの部分を覚えておいてください。「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」。これが、典型的な申命記の文体の特色をあらわしています。「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして」。これとそっくりの部分が、何度も歴史書の中に出てきます。そこで、申命記の影響を受けているということ、申命記史書と呼ぶわけです。

申命記の中心思想(2) 一つの民

次に、一つの民ではありますが、もちろん申命記では、後に王国が分裂して二つの国になるなんていうことは示唆されていません。ここでも、「わたしたちの神」とあるように、「イスラエル」が「わたしたち」という言葉で統一されている。また、ヤハウェは「我らの」神です。そして、語り掛けの対象としては「あなた」という言葉で呼びかけられていて、つまりイスラエルは一つの民である。しかも申命記は、イスラエルは他の民族と違い、ヤハウェによって選ばれた民である、ということを非常に強調する文書です。いわば、選民思想の源であるとも言われているわけです。例えば、申命記 7 章 6 節以下に、「あなたがたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた」(申 7：6-8)とある。たいへん有名なところですね。逆に、何故一つの民であることが強調されるかというと、申命記が書かれたのはおそらく王国時代の末期であって、イ

イスラエルが、ソロモンの死後南北の二つの王国に分裂してきたことが暗に前提とされている。そして、その再統合が目差されているわけです。おそらくはすでに北王国が滅亡して、旧北王国の避難民たちが生き残っているユダ王国にたくさん逃げてきたような状況が背景にあります。そのような人々を含めて、民族としての統一性を再構築することが求められているのでしょう。

申命記の中心思想(3) 一つの聖所

そして三番目が、一つの聖所。これが、申命記の一番重要な特色の一つです。それまで、イスラエルにもユダにも、各地にいろいろな聖所があって、人びとは自分がいるところの近くの聖所で祭を普通に行ったりしていたわけです。

例えば、先ほども触れた、出エジプト記中の、申命記法より古いと考えられている「契約の書」の中では、神を礼拝する場所について、神の名の唱えられる場所ならどこでもいい、というようなことが書いてあります。「わたしのために土の祭壇を造り、焼き尽くす献げ物、和解の献げ物、羊、牛をその上にささげなさい。わたしの名の唱えられるすべての場所において、わたしはあなたに臨み、あなたを祝福する」(出 20:24)。ですから、複数の聖所があたりまえである、という考えが「契約の書」では前提にされているわけです。

申命記はこれを変えてしまったのです。申命記にとっては、「神の名を置く一つの場所」だけが、正統的な聖所なのです。そこでは、——モーセ時代の設定ですから名前は挙げられませんが——エルサレム神殿の存在が明らかに前提にされていて、聖所は、ヤハウェが「名を置くために選ぶ一つの場所」に限られる。この点を強調するのが申命記の特色です。ですから先ほど見た「契約の書」の、聖所はいろいろな所にある、どこでいけにえを捧げてでもいい、という考え方を、申命記はいわば覆しているわけです。

申命記 12 章を見ていただきたいのですが、「あなたたちは、我々が今日、ここでそうしているように」——これはモーセが語っている、という設定です——「それぞれ自分が正しいと見なすことを決して行ってはな

らない。あなたの神、主が与えられる安住の地、嗣業の土地に、あなたたちはまだ入っていない」。申命記の設定では、カナンの地に入る前ということですからこんな風に書かれているわけです。「ヨルダン川を渡り、あなたたちの神、主が受け継がせられる土地に住み、周囲の敵から守られ、安らかに住むようになったならば、あなたたちの神、主がその名を置くために選ばれる場所に、わたしの命じるすべてのもの、すなわち焼き尽くす献げ物、いけにえ、十分の一の献げ物、収穫物の献納物、および主に対して誓いを立てたすべての最良の満願の献げ物を携えて行」く（申 12：8-11）。わざわざ神の選ぶ場所に供物を持って行かなければならない。そしてそこで、「あなたたちの神、主の御前で、息子、娘、男女の奴隷、町の中に住むレビ人と共に、喜び祝いなさい。レビ人には嗣業の割り当てがないからである」（申 12：12）、こう命じられ、聖所の集中が規定されています。祭儀集中することによって、宗教的な中央集権化が目指されているというわけですね。

申命記とヨシヤ王の宗教改革

さて実は、この申命記の規定通りのことをした王様がいますのです。それが、王国時代末期の前7世紀後半に登場したヨシヤという王様です。カナン征服の指導者「ヨシュア」と名前が似ていますので、間違えないでください。王様の方は「ヨシヤ」。しかもそのヨシヤの治世に、列王記下 22～23 章にあるのですが、エルサレム神殿から一冊の律法の書が発見され、この王はその律法の書に基づいて徹底した宗教改革を行ったとされます。しかも、異教的なものをすべて排除し、そしてエルサレム神殿への祭儀集中を行ったと、こう書かれているわけですね。

実際に、そのヨシヤ王についての記述を列王記から見てみましょう。列王記下 22 章の最初で、「ヨシヤは 8 歳で王となり、31 年間エルサレムで王位にあった」（王下 22：1）とされています。そのヨシヤの治世第 18 年に、神殿の改修工事が行われた。神殿を建てたソロモンの時代から 300 年近く経っていますので、神殿にもあちこちに瑕疵がでてきた。修繕となれば、普段人が入らないところにも工事のための職人が入るわけです。「そのとき大祭司ヒルキヤは書記官シャファンに、『わたしは主の神殿で

律法の書を見つけました』と言った」(王下 22:8)。そこで、その書記官シャファンは、ヨシヤ王のもとにその律法を持ち帰った。そして「王の前でその書を読み上げた。王はその律法の書の言葉を聞くと、衣を裂いた」(王下 22:11)。仰天して恐れたというのですね。

そして 23 章に入ると、ヨシヤ王は国民を召集して、神との契約を更新します。「人を遣わして、ユダとエルサレムのすべての長老を自分のもとに集めた。王は、ユダのすべての人々、エルサレムのすべての住民、祭司と預言者、下の者から上の者まで、すべての民と共に主の神殿に上り、主の神殿で見つかった契約の書のすべての言葉を彼らに読み聞かせた」(王下 23:1-2)。そして契約を結んで、神に仕えること、ヤハウエに仕えることを誓った。

さっそく、ヨシヤ王は宗教改革事業に取り組みます。まず行ったことは、異教的なものをエルサレム神殿から払拭することです。先ほども触れましたが、ヨシヤ以前の王たちがかなり不信仰でありまして、偶像的なものや、あるいは異教的なものを神殿に持ち込んでいた。ヨシヤは、「主の神殿からバアルやアシェラや天の万象のために造られた祭具類をすべて運び出させた」(王下 23:4)。バアルとは先住民カナン人の豊穡神、アシェラとは女神のことです。同時に、注目すべきことは、ここでヨシヤ王が、エルサレム以外の地方聖所を閉鎖して、そこにいた祭司たちをみなエルサレムに集めたということです。「王はユダの町々から祭司をすべて呼び寄せ、ゲバからベエル・シェバに至るまでの祭司たちが香をたいていた聖なる高台を汚し……」(王下 23:8)。この、「聖なる高台」という代物、これは「バーマー」というのもので、エルサレム以外の地方聖所を意味します。もともとは「高台」、「高いところ」という意味なのですが、それじゃ意味が分からないというので、新共同訳では、祭儀の場所だということを分らせるために、「聖なる」という言葉を補っているんですね。原文には「聖なる」なんて言葉はなくて、ただの高台、要するに祭儀のための高台聖所のことです。それを汚し、「城門にあった聖なる高台をも取り壊した」。こうして、エルサレムにすべての祭司を集め、祭儀集中を行なったというわけです。

実は申命記という文書はこの、紀元前 7 世紀末に行われたユダの王ヨシヤの宗教改革に関連していると考えられています。このことを、デ・

ヴェッテというドイツの学者が、19世紀の最初に指摘し、それが今でも基本的には受け入れられています。ヨシヤ王は、エルサレム神殿から発見された律法の書に基づき祭儀改革を断行し、特に異教的なものの排除と、エルサレム神殿への祭儀集中を行った。この二つが、異教的なものを排除しなさい、それから神の選ぶ場所に祭儀を集中させなさい、という申命記の要求とぴったり一致するわけです。

そこで今の研究では、申命記という文書は、モーセの告別説教の形式をとって語られてはいるけれども、おそらく、ヨシヤ王に自分たちの目指す宗教改革を断行させるために、モーセの権威を借りて書かれ、こういうものが発見されましたと言って王に示されたのだと、つまり、王に働きかけて改革を断行させるために、著者たちがこういう形で書いたのだろうと考えられているわけです。

特に注目すべきは、同じ申命記17章に、王の法がある。これは出エジプト記には見られない法です。そしてその中で王に何が命じられているかと言いますと、「彼が王位についたならば、レビ人である祭司のもとにある原本からこの律法の写しを作り、それを自分の傍らに置き、生きている限り読み返し、神なる主を畏れることを学び、この律法のすべての言葉とこれらの掟を忠実に守らなければならない」(申17:18-19)。つまりこの申命記の律法を王が実行しなければならない、と書いてあるわけです。その申命記がどこにあるかというところ、「レビ人である祭司の前」にある。先ほどの申命記の12章覚えてらっしゃいますか。勝手なところで儀式を行ってはならない。神の選ぶところで、「息子、娘、男女の奴隸、町の中に住むレビ人と共に、喜び祝いなさい」とある。だから、申命記はおそらく、そのレビ人たち、レビ人祭司が書いたのではないかと考えられているわけです。そしてヨシヤ王はこの王の法の通りに、申命記の掟を忠実に学び、またそれを実現したことになります。

ヨシヤ王については、列王記でこう書かれています。ヨシヤ王についての最後の記述ですが、「こうして彼は祭司ヒルキヤが主の神殿で見つけた書に記されている律法の言葉を実行した。彼のように全くモーセの律法に従って、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして主に立ち帰った王は、彼の前にはなかった」(王下23:25)。ここに、さっきの申命記のシェマーの祈りの言葉が、そのまま取り入れられていますね。だから、この

列王記を含む歴史書は、申命記の精神に基づき書かれた、ということで申命記史書と呼ばれているわけです。

では、申命記とは何かということを説明しましたので、そのことを踏まえたうえで、申命記史書とは何か、という話をしたいと思います。

マルティン・ノートと申命記史書の「発見」

このように、申命記がヨシヤ王の時代の宗教改革と関連するというのは、先に述べましたように、19世紀の最初にデ・ヴェッテというドイツの旧約学者が指摘して以来定説化しているわけですが、それじゃあ今度のは、ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記という一連の歴史書が、単一の長大な歴史記述をなす、という風に考えた人物は誰かかというと、これは20世紀の中頃に活躍したドイツのマルティン・ノートという学者で、同じドイツのゲアハルト・フォン・ラートと並んで20世紀の最大の旧約学者の一人と言われている人です。彼が、1943年に出した本で、これらの聖書の諸文書が「申命記史書」という単一の歴史書をなすことを明らかにしました。日本では『旧約聖書の歴史文学 伝承史的研究』（日本基督教団出版局）という書名で出ていますが、実はこれは私が30年近く前に訳したもののなのです。

この書物の中で、ノートは、ヨシュア記から列王記までの一連の歴史書が、申命記主義的な精神、用語法で書かれた一続きの歴史記述をなすことを論証し、それがあある一人の人物——申命記史書の著者ですから「申命記史家」と呼ばれます——によって、ユダ王国が滅亡し、バビロン捕囚が始まった時代（前6世紀はじめ）に書かれたのだと主張しました。

この歴史書が、そのような時代に書かれたことは、列王記の最後がユダ王国の滅亡とバビロン捕囚の始まりの記事で終わっていることから明らかです。列王記下25章に、ゼデキヤというユダ王国の最後の王について、こう書かれています。「ゼデキヤの治世第9年の第10の月の10日に、バビロンの王ネブカドネツアルは全軍を率いてエルサレムに到着し、陣を敷き、周りに堡壘を築いた。都は包囲され、ゼデキヤ王の第11年に至った。その月の9日に都の中で飢えが厳しくなり、国の民の食糧が尽き、都の一角が破られた」（1-4節）。このように、エルサレムの陥落が描

かれます。王様自身も捕らえられます。そして神殿も焼かれてしまいます。バビロン軍が「エルサレムに来て、主の神殿、王宮、エルサレムの家屋をすべて焼き払った。大いなる家屋もすべて、火を放って焼き払った」(同 8-9 節)。こうして多くの人々が、「捕囚とされ、連れ去られた。この地の貧しい民の一部は、親衛隊の長によってぶどう畑と耕地にそのまま残された」(同 12 節)。

ノートは、ユダ王国が滅亡しバビロン捕囚が始まった時代に、一人の人物が過去を回顧しながらこの長大な歴史書を書いた、というふうに考えたのです。ノートによれば、その意図は、ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚という破局を、人々や王たちが犯した罪に対する神の裁きとして説明することでした。国が減びたり、捕囚になったりしたのは、決してイスラエルの神ヤハウェが無力でバビロンの神々に敗れたからではない。その責任は王や民の側にある、として、ヤハウェへの信仰を守ろうとした、というわけです。

このような歴史書についてのノートの理解は、その後の旧約研究では世界中で広く受け入れられるようになりました。

ノート説の修正(1)—— 三重編集説

ところが、ノート以後の研究では、ヨシュア記から列王記までの文書全体が一つの歴史記述をなしていて、そこに申命記的な歴史観が貫かれていることや、それが王国滅亡の時代に今の形で成立したことはほとんど異論なく受け入れられましたが、全体がたった一人の人物、単独個人の申命記史家によって書かれたということについては、さまざまな疑問が出されたのです。

細かく分析してみると実は、申命記史書の中には、かなりの思想的多様性がみられることが分かりました。一人の人間が書いたのなら、こんな多様性は出てこないだろうというわけです。ある部分では、非常に預言者的な関心が支配している。先ほど、カナン征服時代のヨシュアが呪いをかけたら、それが何百年もあとのアハブ王の時代に成就したという、預言と成就の図式が出てきましたよね。しかし、他の部分ではそういう関心はあまり見られず、むしろ律法的な関心が非常に顕著である。例え

ば、ダビデが死ぬときに息子ソロモンに遺言として、こういう風に言うのです。「あなたの神、主の務めを守ってその道を歩み、モーセの律法に記されているとおり、主の掟と戒めと法と定めを守れ」(王上2:3)。掟と戒めと法と定め。これらは原文では全部違う言葉なのですが、このように律法用語がずらーっと繰り返されるような場面がよくあって、そのような部分には預言者的な関心はほとんど見られない。そういう多様性が見られるのです。そこで、その後の研究では、申命記史書内部の神学的多様性がより詳しく明らかにされ、複数の著者による学派的な著作と理解されるようになって、現在では、この点ではノートの説が修正されるようになりました。

ノート説の修正は、大きく見て、二つの方向に進みました。一つはドイツのゲッティンゲン大学のルドルフ・スメントという学者が提唱し、その弟子であるディートリヒやヴェイヨラ——この人はフィンランド人ですが——が発展させた三重編集説で、今見たような、関心の違いによって申命記史書の編集を三つに区別するものです。この理論によれば、ノートの言うように、王国滅亡後の捕囚時代に、まず、破局の原因を説明するためにカナンの地の獲得(ヨシュア記)からその喪失(列王記)までを物語る歴史記述が成立した。ただしそこでの関心はもっぱら、歴史を物語ることだけだったということです。「申命記史家」をドイツ語で言うと「デア・ドイトロノミシエ・ヒストリカー」となって非常に長いので、旧約学ではよくDtrH(デーテーエル・ハー)という略号を使います。歴史家だから「ヒストリカー」で、頭文字のエイチです。このDtrHが書いたのが申命記史書の原形ということになります。

ところが少し後に預言者的関心を持った編集者がこれに手を加え、歴史が預言者の言葉によって動かされているように脚色した。すなわち、あちこちに預言者たち、例えばエリヤやエリシャの物語を挿入したり、先ほど見たような預言と成就の図式(例えば列王記上11:29-36→同12:15)を組み入れて、全体に預言者的な性格を付け加えた、と見るのです。この編集者も、申命記的な用語や思想を共有しているので、同じ「学派」の一員と見なされます。預言をドイツ語では「プロフェティー」(Prophetie)と言いますので、この編集者はDtrP(デーテーエル・ペー)と呼ばれます。

さらに後になってから、今度は律法主義的な関心の強いもう一人の申命記主義的編集者が、先に見たような「主の掟と戒めと法と定めを守れ」というような文章をあちこちに付け加えて、律法遵守の大切さを読者に訴えた、とされるわけです。「律法主義的」をドイツ語では「ノミスティシュ(nomistisch)」と言いますから、この編集者は DtrN(デーテーエル・エヌ)と呼ばれます。

ノートの考え方が受け継がれているのは、この三人の編集者がいずれも捕囚時代の人であったとされる点で、いわばノートの捕囚時代の単独の申命記史家を、関心の違いによって三人に分けたことになります。これがドイツを中心に広がっている三重編集説です。

もう一つの修正案(2)——二段階編集説

ところが、別の修正案がアメリカから出されました。成立年代についてこれと別の考え方ができる、というのですね。どういうことかといいますと、申命記史書は、先に見たように、たしかに最後のところは、ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚の始まりで終わるわけです。そうすると、たしかに今ある形の申命記史書では、ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚が前提になっており、今ある形と内容のものがこの時代、つまり捕囚時代以降に書かれたことは間違いがないわけですね。しかし、申命記史書をよく読んでみますと、明らかにダビデ王朝が存続しており、エルサレム神殿もまだある、という状況が前提にされているとしか読めない部分があちこちにあるのです。

一つの例を挙げます。ソロモンが神殿を建てて、先ほども出てきました契約の箱を、神殿の奥に安置した、という記述があります。そしてそこに、こう書かれているのです。「祭司たちは主の契約の箱を定められた場所、至聖所と言われる神殿の内陣に運び入れ、ケルビムの翼の下に安置した」。ケルビムというのは天使みたいな、羽根のある、スフィンクスみたいなもので、それが「箱のある場所の上に翼を広げ、その箱と担ぎ棒の上を覆うかたちになった」。箱には二本の棒がついていて、御神輿みたいに担いだわけです。「その棒は長かったので、先端が内陣の前の聖所からは見えたが、外からは見えなかった。それは今日もおそこに置か

れている」(王上8:6-8)。これは、エルサレム神殿が火で焼かれた後に書かれたものとは考えられないわけです。あくまでエルサレム神殿があって、契約の箱があって、棒の先っちょがちらっと見えているような状態の時期に書かれた、としか考えられない。

それからサムエル記には、ダビデの子孫は神の加護のもとで永遠に栄えるという、ナタン預言というものがあります。「わたしは慈しみを彼から」——この「彼」はダビデの子孫のことです——「取り去りはしない。あなたの前から退けたサウルから慈しみを取り去ったが、そのようなことはしない。あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」(サム下7:15-16)。この「とこしえに」という言葉は、ヘブライ語で言えば「アド・オーラム」というのですが、別の言葉でいえば「永遠に」ということです。そのダビデの子孫が永遠に王座につく、ということは、ダビデ王朝が存続している、永続しているということを前提にしている文章としか読めないわけです。

同じように、ユダ王国が危機に陥った時も、ヤハウェがダビデのために「ともし火がわたしの前に絶えず燃え続ける」ようにするという約束が繰り返される(王上11:36, 15:4, 王下8:19)のですが、こんな約束もダビデ王朝が滅びた後では意味がないわけですね。

そもそも、エルサレム神殿のみへの祭儀集中を命じている申命記や、あるいは申命記史書が、神殿が破壊された後になってから初めて書かれた、ということは考えにくいのです。神殿があるからこそ、そこに祭儀集中をするべきだ、というわけですね。

そこでユダ王国滅亡を前提とする申命記史書の最終形態、つまり、ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚の始まりで終わる今の形のものの以前に、ユダ王国と神殿が現に存続していることを前提とする、申命記史書の先駆形態が成立していたと考えられてよい。

ではその先駆形態はいつごろ成立したかということ、一番話が合うのが、先ほどの、ヨシヤ王の時代だったということになります。最初の申命記史書は、すでに王国時代末期のヨシヤ王の時代に、まさにそのヨシヤ王の宗教改革活動をクライマックスとする形で書かれたのではないかと、そういう風に考える人たちが出てきたわけです。ヨシヤ王による、祭儀

集中と、異教的要素の排除を伴う宗教改革の時期に書かれたと考える。これはアメリカ人の研究者が多くて、ハーバード大学のクロスという学者が提唱し、その弟子であるネルソン、フリードマン、ハルパーン、クノッパースなどが発展させた説です。こういう形で、申命記史書の成立を少し時代を前に早めて修正した。それが王国滅亡と捕囚の時代になってから、そのわけを説明するために増補訂正されたと見るわけです。言わば、捕囚前の時代と捕囚後の時代に分けて考える二段階編集説です。

申命記史書の成立

私は基本的にはこちらの考え方で腑に落ちると思っています。また、ドイツの三重階編集説とアメリカの二段階編集説が、まったくの水と油で相いれないものだ、とも言えない。実際に、オーストラリアのオブライエンとかスイスのレーマーといった学者たちは、この二つの説をうまく統合して、両方の説の良さをともに生かそうとしています。このうち、レーマーのものは、『申命記史書 旧約聖書の歴史書の成立』（日本キリスト教団出版局）という書名で、私が訳しました。この二人の学者は、スメントの言う「DtrH」、すなわち最初の申命記史家を、捕囚時代ではなく、ヨシヤ王の宗教改革の時代に引き上げて考える。私もそれが、いちばん説得力がある見方だと思います。

すなわち申命記史書は、まず前7世紀末のヨシヤ王の時代に、この王の宗教改革そのものを支持し、それをいわば補完するために、別の言葉で言えばそれを神学的に正当化するために書かれたと仮定すると、いろいろなことが説明できるわけです。前に見たように、ヨシヤ王の治世の記述は事実上申命記史書のクライマックスをなします。おそらく、第一の申命記史家たちは、ヨシヤ王の同時代人であり、ヨシヤ王の改革の支持者であって、この改革を側面から支え、それを神学的に正当化するための意図をもって、この歴史記述を行ったのだらうと考えられます。

しかし、その後40年もしないうちに、ユダ王国自体が滅亡してしまい、祭儀集中の焦点であったはずのエルサレム神殿も破壊され廃墟となってしまった。そこで申命記的な思想を引き継ぐ捕囚時代の「第二の申命記史家たち」が、ノートの言ったような意味で、なぜそのような破

局が来てしまったのかを人々や王たちの罪から説明し、悔い改めとヤハウエへの立ち帰りを求めた。このように考えれば、現在ある申命記史書の内容的多様性と複雑な性格がうまく説明できる、このように思われるわけであります。

申命記史書の歴史観(1) 第一の申命記史家たちの場合

さて、いよいよ本題の申命記史書の歴史観ということになるわけですが、もし、これまでお話ししてきたように、申命記史書が、ノートが最初に考えたように単独個人の著作ではなく、申命記的な思想を共有する何人もの人々の学派的著作であり、しかも、その成立に大きく見て、まだ王国もダビデ王朝もエルサレム神殿も健在で、しかもヨシヤという敬虔で熱意ある王が宗教改革に取り組んでいた時代と、そのわずか数十年後ではあるが、王国もダビデ王朝もエルサレム神殿もすべてが失われてしまったバビロン捕囚の時代の二段階があるという前提に立てば、申命記史書の歴史観についても、やはりこの二つの段階に分けて考えたほうがよい、ということになると思います。

第一の申命記史家たち、すなわちヨシヤ王の時代に申命記史書の最初の形態を作り出した人々ですが、彼らの目的は、歴史といっても単に過去の出来事を記録するだけではなく、何故そのようなことになったのかということ、宗教的合理主義の立場から説明することであったと思います。もちろんここでいう宗教的合理主義というのは、最初に言いましたように、旧約聖書にとって歴史は神が動かすものですから、神は何故そのような仕方では歴史を動かしたのか、ということの説明するということです。

まず、ヨシュア記は、カナン征服の物語です。第一の申命記史家たちにとって、カナン征服はもちろん神の恵みであり、神から与えられた、イスラエルに対する賜物です。それがヨシュア記の最初で、神がヨシュアに語る言葉のうちに表現されているわけです。いわば神の恵みとしてカナンの地が与えられる。

ヨシュア記一章を見てみましょう。先ほど言ったように、申命記はモーセの死で終わります。そのモーセの代わりに指導者となるのがヨシュア

で、モーセの後継者として、カナンの地の征服の指導者となります。

「主の僕モーセの死後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた。『わたしの僕モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む大海に至るまで』」（ヨシュ1：2-4）。すなわち、地中海に至るまでですね。それが、「あなたたちの領土となる」。これは一方的な約束なわけでありまして、それが成就してカナンの地が手に入る。

そして士師記に入りますと、敵との闘いが続きます。まだ王様のいない時代です。イスラエルは強大な敵に囲まれておりました。北のアラム人、東のアンモン人とモアブ人、南のエドム人、西のペリシテ人。そしてイスラエルは、いつもそれらの異民族の攻撃を受けるわけです。なぜそんなに厳しい状況に陥るのか。神からカナンの地を征服されたにもかかわらず、なぜ他の民族の攻撃に苦しまねばならないのか、という問題が生じるわけです。申命記史家たちは、ここをこう説明するわけです。敵の侵略がおこるのは、イスラエルがヤハウェに罪を犯したからだ。具体的に言うと、ヤハウェに忠実でなく、他の神々を拝んだりしたからだ。だからその罰として、異民族の攻撃がくる。イスラエルが異民族の侵略に苦しむことは、ヤハウェへの背教のための神罰である。しかし、悔い改めてヤハウェに回帰するならば、ヤハウェは救ってくれる。この点は、かなり楽天的なんですね。

士師記2章にそのことが図式的に述べられています。「主の僕、ヌンの子ヨシュアは110歳の生涯を閉じ、エフライムの山地にある彼の嗣業の土地ティムナト・ヘレスに葬られた。……その世代が皆絶えて先祖のもとに集められると、その後、主を知らず、主がイスラエルに行われた御業も知らない別の世代が興った。イスラエルの人々は主の目に悪とされることを行い、バアルに仕えるものとなった」（士2：8-11）。

異教の神を信じるわけです。「彼らは自分たちをエジプトの地から導き出した先祖の神、主を捨て、他の神々、周囲の国の神々に従い、これにひれ伏して、主を怒らせた。彼らは主を捨て、バアルとアシュトレトに

仕えたので、主はイスラエルに対して怒りに燃え、彼らを略奪者の手に任せて、略奪されるがままにし、周りの敵の手に売り渡された。彼らはもはや、敵に立ち向かうことができなかった」(同2：13-14)。ヤハウェに背教すれば、敵の攻撃が起こるというわけです。しかし、悔い改めてヤハウェに救いを求めれば、神は赦して救ってくれる。「彼らは苦境に立たされた。主は士師たちを立てて、彼らを略奪者の手から救い出された」(同2：15-16)。イスラエルがヤハウェに立ち帰れば、ヤハウェは救ってくれるのだと、こういうふうに申命記史家たちは士師記全体を整理しているわけです。いかにも宗教改革の時代にふさわしい歴史観ではありませんか。

さて、サムエル記になりますと、王国時代に入ります。しかし、最初のサウルはヤハウェへの背教により退けられた。だから申命記史家たちの歴史観は、完全ないわゆる応報史観でありまして、背教した者はヤハウェ自身によって罰せられる。でも、ヤハウェに仕えたものはヤハウェの恵みを受けるということなのです。

最初の王様サウルはヤハウェの掟を守らなかった。具体的に言うと、旧約聖書、特に申命記には、聖絶思想という少し残酷な掟があります。「聖」なる「絶」滅の掟ですね。イスラエルの敵は神の敵であるから皆殺しにしなければならない(申7：1-5)。これを、現代に聖書を読む場合にどう理解するか、現代の神学者がいろいろと問題にするところですが、その問題も今日は取り上げられません。大変な問題ですから。少なくとも、旧約聖書では敵を絶滅するのがむしろ義務であるとされている。

ところがサウルは、敵であったアマレク人の王と、和を結んだのです。「イスラエルがエジプトから上って来る道でアマレクが仕掛けて妨害した行為を、わたしは罰することにした。行け。アマレクを討ち、アマレクに属するものは一切、滅ぼし尽くせ。男も女も、子供も乳飲み子も、牛も羊も、ラクダもロバも打ち殺せ。容赦してはならない」(サム上15：2-3)。これが神の命令であったわけです。しかしサウルは、戦いに勝ったのに、アマレク人の王を生かしておいて、「羊と牛の最上のもの、初子ではない肥えた動物、小羊、その他何でも上等なものは惜しんで滅ぼし尽くさず、つまらない、値打ちのないものだけを滅ぼし尽くした」(同15：9-10)。相手の王様を生かしておいて交渉した、それから家畜も、つ

まらないものだけを形式的に滅ぼしつくしたわけです。すると預言者サムエルがやってきまして、「主が喜ばれるのは焼き尽くす献げ物やいけにえではない、むしろ主の御声に従うことである」と非難する。そして、「主の御言葉を退けたあなたは王位から退けられる」、と宣言する（同15：22-23）。こうしてサウルは、王位を全うせずに、敵との戦いで戦死して死んでしまうわけです。

ところが、それを継いだダビデの方は、ヤハウェから永遠の王朝の確立を約束された。それがサムエル記下7章のナタン預言でありまして、先ほどお読みしましたが、ここは非常に重要ですから、もう一度見てください。

なんとここでは、王朝を確立できなかったサウルと、永遠の王朝の始祖となるダビデが対比されている。ここはダビデに語られた言葉ですから、ここで言う「あなた」とはダビデのことです。「あなたの前から退けたサウルから慈しみを取り去ったが、そのようなことはしない。あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」（サム下7：15-16）。先にも言いましたように、この部分は、まだ明らかにダビデ王朝が存続している、しかもこれから存続するという期待のもとで書かれている、としか読めません。王朝を確立できなかったサウルとは異なり、ダビデは「とこしえに」続く王朝の約束をヤハウェから受けているのだ、という観点で書かれている。もちろん宗教改革を行ったユダ王のヨシヤは、ダビデの子孫であります。

列王記に入ります。列王記では、ソロモンが神殿建設を行います。エルサレム神殿は先ほども述べましたように、申命記主義的な立場から言えば、唯一の正統的な聖所であり、ソロモンがそれを建設したことはまさにヤハウェの意志の成就であって、その神殿をヤハウェは全面的に受け入れたのだと、これが申命記史家たちの記述するところであります。

例えば、神殿を建てるときに、イスラエルは乾燥しているので、よい木材がないものですから、レバノンのフェニキア人の材木を輸入することになるわけであります。そこでソロモンは、フェニキアの王ヒラムに「主が父ダビデに、『わたしがあなたに代えて王座につかせるあなたの子、わたしの名のために家を建てる』と言われた」から、自分がそれを

実行するのだと言っています(王上5:19)。そこでヒラムは快くこれに応じて、「今日こそ、主はたたえられますように。主は、この大いなる民を治める聡明な子をダビデにお与えになった」と言って、神殿を建てるのに協力した(同5:21)。こうして、ソロモンが神殿を建て始めます。「ソロモン王が主の神殿の建築に着手したのは、イスラエル人がエジプトの地を出てから480年目、ソロモンがイスラエルの王になってから4年目であった」(同6:1)。こうして神殿の建設が記されていきます。

そしてその神殿が完成したときに、ソロモンがそれをヤハウェに奉獻するとですね、ヤハウェが現れて、「わたしはあなたがわたしに憐れみを乞い、祈り求めるのを聞いた。わたしはあなたが建てたこの神殿を聖別し、そこにわたしの名をとこしえに置く」と約束する(同9:3)。ですからこの場面も、明らかにまだ神殿が存続している時代に書かれたとしか読めない。エルサレム神殿はヤハウェによって全面的に受け入れられたとされているわけですから。

ところがそのソロモンが死んだ後、王国は北と南に分裂する。ユダ王国とユダ部族以外のイスラエル王国に、です。どうしてそんなことになったのかという問題が出てきます。すると、申命記史家たちはこのようにそれを説明します。ソロモンは立派な王様だった。エルサレム神殿を建てたたいへん立派な王様だったのだが、晩節を汚して逸脱し、「聖なる高台」、つまりエルサレムの神殿以外の聖所を造ったり、また特に、外国人の妻たちが他の神々を礼拝したりするのを許した。その罰として王国分裂になるのだ、という説明です。ソロモンが老境になって、やっぱりちょっと老人ぼけをして、罪を犯しちゃうわけですね。

「ソロモン王はファラオの娘のほかにもモアブ人、アンモン人、エドム人、シドン人、ヘト人など多くの外国の女を愛した」(王上11:1)。エルサレムには大きなハレムがありましてね、一種の政略結婚でたくさんの外国の女性がソロモンのもとへやってきていたのです。ソロモンには、「700人の王妃と300人の側室がいた」(同11:3)とされます。まさに大奥以上です。「彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせた。こうして彼の心は、父ダビデの心とは異なり、自分の神、主と一つではなかった」。彼女たちのために、「そのころ、ソロモンは、モアブ人の憎むべき神ケモシュのために、エルサレムの東の山に聖なる高台を築いた。アン

モン人の憎むべき神モレクのためにもそうした」(同 11：3-5)。そこでヤハウェが激怒しました。先ほども言ったように、ヤハウェは怒らせると怖い神であります。「あなたがこのようにふるまい、わたしがあなたに授けた契約と掟を守らなかったゆえに、わたしはあなたから王国を裂いて取り上げ、あなたの家臣に渡す。あなたが生きている間は父ダビデのゆえにそうしないでおくが、あなたの息子の時代にはその手から王国を裂いて取り上げる。ただし、王国全部を裂いて取り上げることはしない。わが僕ダビデのゆえに、わたしが選んだ都エルサレムのゆえに、あなたの息子に一つの部族を与える」(同 11：11-13)。これがユダ部族に当たるわけです。このようにして、ソロモンが罪を犯したのに、なぜソロモン自身の時代ではなく、その息子の時代になってから王国分裂が起こるのか、しかも一つの部族だけはダビデ王朝に残るのかを巧みに説明しているわけです。この歴史家たちはなかなか芸が細かくてですね、ソロモンが直接罰せられないのも、ユダ王国だけはダビデ王朝に残るのも、ダビデに対するヤハウェの愛顧のゆえである、ということで、論理的に歴史の展開を説明している。

王国分裂はそのように、ソロモンの罪に対するヤハウェの意志によるのですが、その分裂した北王国の最初の王ヤロブアムは、ベテルとダンに、金の子牛——要するに偶像ですよ——を置き、また聖なる高台(パーマー)を造ったことにより罪を犯しました。王国を割ったわけですが、ヤロブアムが最初にやったことは、エルサレムに対抗して、新しい聖所を作り、そこに金の子牛の像を置くことだった。国民がエルサレムの神殿に参拝を続けるようなら、やがてダビデの家にこの国が戻ってしまうと考えたのですね。

『「この民がいけにえをささげるためにエルサレムの主の神殿に上るなら、この民の心は再び彼らの主君、ユダの王レハブアムに向かい、彼らはわたしを殺して、ユダの王レハブアムのもとに帰ってしまうだろう』。彼はよく考えたうえで、金の子牛を二体造り、人々に言った。『あなたたちはもはやエルサレムに上る必要はない。見よ、イスラエルよ、これがあなたをエジプトから導き上ったあなたの神である』。彼は一体をベテルに、もう一体をダンに置いた。この事は罪の源となった」(王上 12：27-29)。しかもヤロブアムは、そのような牛の像を安置するために、聖

なる高台を築きました。「彼はまた聖なる高台に神殿を設け、レビ人でない民の中から一部の者を祭司に任じた」(同 12:31)。つまり、イスラエルではレビ部族以外は祭司になれなかったわけですが、そのようなレビ人でない祭司を任じた、つまり、非正統的な祭司を任じた。これが大きな罪になったというわけですね。これが北王国におけるヤロブアムの罪であります。

分裂後の記述をみますと、北王国イスラエルのほとんどの王たちは、このヤロブアムの罪を繰り返したがゆえに断罪されています。つまり、みんな悪い王である、なぜならヤロブアムの罪を繰り返したから、というわけです(王上 15:26, 16:2, 7, 26, 31 等参照)。そして最終的に北王国が先に滅亡してしまうのも、ヤロブアムの罪が矯正されなかった結果であると、こういうふうに説明されていくわけです(王下 17:7-23)。

これに対して、南のユダ王国の王たちは、ダビデ王朝の王たちということになるわけですが、祭儀集中をしたかどうか、そして異教的要素を排除したかどうかという、二つの申命記的基準に照らして、これに従った王は肯定的に評価され、これに背いた王は否定的に評価されていくわけです。言ってみれば、申命記的基準に合致するかどうかによって、是々非々に評価される。

例えば、肯定的に評価される王の代表として、ヒゼキヤという王様を挙げてみます。列王記下 18 章です。「彼は、父祖ダビデが行ったように、主の目にかなう正しいことをことごとく行い」云々と称賛されています(王下 18:3)。では具体的にどうしたかというと、「聖なる高台を取り除き」、つまりこれは祭儀集中を行ったということですね。地方聖所を廃止したわけです。「石柱を打ち壊し、アシェラ像を切り倒し、モーセの造った青銅の蛇を打ち碎いた。イスラエルの人々は、このころまでこれをネフシュタンと呼んで、これに香をたいていたからである。彼はイスラエルの神、主に依り頼んだ」(同 18:4-5)。つまり、異教を廃除し、聖なる高台と言われる地方聖所をも排除した王は、正しく敬虔な王なのですね。

これに対して、例えば次の王様のマナセでは、「彼は主がイスラエルの人々の前から追い払われた諸国の民の忌むべき慣習に倣い、主の目に悪とされることを行なった」(王下 21:2)。何をしたのかと言うと、「彼は父

ヒゼキヤが廃した聖なる高台を再建し」、つまりこれは父が行った祭儀集中を逆に戻してしまった。地方聖所を再建してしまった。そして「イスラエルの王アハブが行ったようにバアルの祭壇を築き、アシェラ像を造った。更に彼は天の万象の前にひれ伏し、これに仕えた」(同 21:3)。異教的なものを推進し、あるいは祭儀集中に反する行動をした王は、すべて断罪されている。だから、是々非々で評価されているわけです。

ただし重要なことは、ダビデ王朝そのものには、ヤハウェの恵みにより永遠の存続が約束されているのです。たとえば列王記上 15 章には、ユダの王でも悪い王様が出てきます。アビヤムですね。そこに注目すべきことが書かれています。「彼もまた父がさきに犯したすべての罪を犯し、その心も父祖ダビデの心のように、自分の神、主と一つではなかった。彼の神、主は、ただダビデのゆえにエルサレムにともし火をともし、跡を継ぐ息子を立てて、エルサレムを存続させられた。ダビデが主の目になかう正しいことを行なったからである」(王上 15:4-5)。まあダビデもちょっとは罪をおかしたけれども、全体としては善かった、というわけですね。ここでは、明らかにダビデの王朝とエルサレムの町が存続しているということが前提になっているわけです。ですからこれは、王国以前に書かれたと考えられるわけです。

さて、南王国の中でもっとも高く評価されているのがヨシヤです。先ほど見たように、ヨシヤは、「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして」、ヤハウェの戒めを守った王として描かれています(王下 23:3, 25)。前に見たように、ヨシヤは神殿から発見された律法の書、すなわち申命記を尊重し、それに基づく宗教改革を断行した。この改革を通じて、彼は異教的なものを排除し、祭儀集中を行って、地方聖所を廃止したわけです。これにより、ソロモンの堕落からはじまった異教と祭儀集中違反の罪の状態が一度解消されているわけですね。

更にヨシヤは、エルサレムの改革だけではなく、先ほどの北王国最初の王ヤロブアムが開いた異端の聖所であるベテルとか、あるいはかつての北王国の首都であるサマリアにまでその改革を広げたと書いてあります。「彼はまたベテルにあった祭壇と、イスラエルに罪を犯させたネバトの子ヤロブアムが造った聖なる高台を取り壊し、更に聖なる高台を焼いて粉々に砕き、アシェラ像を焼き捨てた」(王下 23:15)。あるいはその

前には、ヨシヤが「ソロモンがシドン人の憎むべき神アシュトレトのため、モアブ人の憎むべき神ケモシュのため、アンモン人の忌むべき神ミルコムのために築いた」高台聖所を破壊し、汚したことが書かれています(王下 23:13-14)。そうすると、ソロモンの罪も、それからヤロブアムの罪も、このヨシヤ王が解消したことになります。

しかも実は、ヨシヤの時代よりもずっと前のヤロブアムの時代を扱う列王記上 13 章には、たいへん面白いことが書かれているのです。それは北王国の最初の王ヤロブアムが、非正統的な祭壇をベテルに築いて背教したときに、「主の言葉に従って神の人が」——つまり預言者的な人物が——「ユダからベテル」にやって来たとされます。「ヤロブアムは祭壇の傍らに立って、香をたいていた。その人は主の言葉に従って祭壇に向かって呼びかけた。『祭壇よ、祭壇よ、主はこう言われる。見よ、ダビデの家に男の子が生まれる。その名はヨシヤという。彼は、お前の上で香をたく聖なる高台の祭司たちを、お前の上でいけにえとしてささげ、人の骨をお前の上で焼く』」と預言したというのです(王上 13:1-3)。ここになると、ヨシヤの名前が出てきますよね。ヨシヤが実際に生まれるのは、300 年も後のことのはずなのに。ということは、ヨシヤは、この預言者の預言も成就したということになるわけです。これは明らかに、ヨシヤ時代に書かれた「事後預言」です。実際に起こったことについて、後から預言という形式で書かれたものを「事後預言」と言います。後から書かれた預言だから、的中するのは当然のことなのですね。ヨシヤの宗教改革を正当化するために書かれた文書の一部だから、こういうことが起こるわけです。こんなところから見ても、申命記史書の基本的部分は、ヨシヤの宗教改革をいわばクライマックスとし、おそらくそこで終わっていたと考えられる。ヨシヤ王の功績をたたえるような目的で書かれたものと見なしうるわけです。

申命記史書の歴史観(2) 第二の申命記史家たちの場合

しかし、その後事態は急変するわけです。それらの宗教改革にもかかわらず、ヨシヤはやがてパレスチナに進出したエジプトの王ネコによって殺されてしまう。これは列王記の先ほどの続きの部分に書いてありま

す。「彼（ヨシヤ）の治世に、エジプトの王ファラオ・ネコが、アッシリアの王に向かってユーフラテス川を目指して上って来た。ヨシヤ王はこれを迎え撃とうとして出て行だったが、ネコは彼に会うと、メギドで彼を殺した。ヨシヤの家臣たちは戦死した王を戦車に乗せ、メギドからエルサレムに運び、彼の墓に葬った」（王下 23：29-30）。つまりこの偉大な王が、宗教改革事業を成し遂げたにもかかわらず、殺されてしまう。これは、宗教的に見ればたいへんな不条理です。それだけでは終わりませんでした。先ほども見ましたように、その数世代後には、ユダ王国はバビロニア王ネブカドネツアルによって滅ぼされ、ダビデ王朝は断絶し、エルサレム神殿は破壊されて、生き残りの人々はバビロン捕囚に送られ、約束の地は失われてしまうわけです。

さてこのような破局が起こったことは、生き残った多くの人々にたいへん大きな神学的な動揺、あるいは信仰の危機をもたらしたに違いありません。実際に、この時代にかかれたイザヤ書の後半やエレミヤ書を読みますと、人々が動揺し、自分たちのヤハウェという神の力に疑問を持ち始めていたことが分かります。われわれの神ヤハウェは、バビロニアの神々にはかなわなかったのではないか、敗北したのではないか、無力だったのではないか、と。

特に神学的に問題であったのは、この王国の滅亡という破局によって失われた、約束の地も、ダビデ王朝も、そして神の都としてのエルサレムも、従来の伝承ではヤハウェの約束によって「永遠に」加護されるとされてきたものなのです。たとえばカナンの土地については、創世記に繰り返すこういう約束があるのです。彼らの祖先に対して、この場合にはアブラハムですが、「あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える」（創 13：14）とされている。ところが、この約束が反古にされてしまったように思われたわけです。土地が奪われた。あるいはエルサレム神殿も、神の住まいで、決して破壊されることはないという信仰があったわけですが、それが覆されてしまったのですね。

そこで、一部の人々の間では、ヤハウェには約束を守り通すことができなかったのではないか、という疑問が生じてきた。こういう歴史的、思想的状況の中で、ヨシヤ王時代の第一の申命記史家たちの精神を受け

継ぐ、捕囚時代の第二の申命記史家たちが、このような信仰の危機の克服を目指して、第一の申命記史家たちの著述に加筆を行ったと考えられるのです。彼らのやったことは、何よりもまず、ヨシヤの非業の死からユダ王国の滅亡に至るまでの歴史記述を付け加えたことです。具体的に言えば、ヨシヤが死ぬ場面から王国が滅びる場面の、約二章半(王下 23：29-25：30)を付け加えた。そして同時に彼らは、何故そのような破局に立ち至ったかを、宗教的合理性をもって説明しようとした。というのも、当時の人々にとって、これらのことはたいへんな不条理だったからです。神が恵み与えたもの、しかも「永遠に」与えると約束した土地も奪われ、王朝も滅びてしまったということは、理解できない不条理です。それだからこそ、信仰を動揺させる、信仰の危機をもたらすわけです。ところが、それを論理的合理的に説明できたならば、その衝撃は、少なくとも弱まる。克服することがより容易になる。

その際に、すでに申命記そのものや、ヨシヤ時代の最初の申命記史書に含まれていた、罪が罰をもたらすという、神学的な応報史観が応用された。つまり、罪と罰の図式で全部を説明しようと、この歴史家たちは考えました。彼は一人の人物に白羽の矢を立てました。それが、ヨシヤ以前に背教を行ったとされる、マナセという王様なのです。

マナセについての記述では、先ほど引用しましたが、他の神々を拝む儀式が導入され、聖なる高台、つまり地方聖所が再建されたとされていきました。列王記下 21 章ですね。マナセは、異教の民、「諸国の民の忌むべき慣習に倣い、主の目に悪とされることを行い」、「バアルの祭壇を築き、アシェラ像を造った」とされています。また聖なる高台を再建したともされています。ここに、ある預言者の言葉が書き加えられました。「ユダの王マナセはこれらの忌むべき事を行い、かつてアモリ人の行ったすべての事より、更に悪い事を行い、その偶像によってユダにまで罪を犯させた。それゆえ、イスラエルの神、主はこう言われる。見よ、わたしはエルサレムとユダに災いをもたらす。これを聞く者は皆、両方の耳が鳴る。わたしはサマリアに使った測り縄とアハブの家に使った下げ振りをエルサレムに用いる」(王下 21：11-13)。サマリアはすでに滅びてしまった北王国の首都で、アハブの家は北王国の王家でした。今からエルサレムとダビデ王国にも、それと同じ運命がヤハウェによって下される、

というのです。「鉢をぬぐい、それをぬぐって伏せるように、わたしはエルサレムをぬぐい去る。わたしはわが嗣業の残りの者を見捨て、敵の手に渡す」(同 21：13-14)。それは何よりも、マナセがこのように大きな罪を犯したからだと、こういう風に、捕囚時代の第二の申命記史家たちは予め伏線を置きました。

そしてヨシヤが死ぬ前、ヨシヤの功績が大いに讃えられた後にも、同じような書き加えを行ったわけです。彼、ヨシヤのように「全くモーセの律法に従って、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして主に立ち帰った王は、彼の前にはなかった。彼の後にも、彼のような王が立つことはなかった」(同 23：25)。おそらくこの箇所から、第二の申命記史家により、ヨシヤの後の歴史の記述が始まります。ヨシヤは偉大であったが、「しかし、マナセの引き起こした主のすべての憤りのために、主はユダに向かって燃え上がった激しい怒りの炎を取めようとなさらなかった。主は言われた。『わたしはイスラエルを退けたようにユダもわたしの前から退け、わたしが選んだこの都エルサレムも、わたしの名を置くと言ったこの神殿もわたしは忌み嫌う』」(同 23：26-27)。ですから、ここにあるように、ヨシヤの宗教改革の事業はもちろん称賛に値するものであったけれども、それ以前のマナセの悪があまりにも大きすぎて、ヨシヤの宗教改革の功績をもってしてもそれを帳消しにすることはできなかった、とされたわけです。ちょっと苦しい論理かもしれませんが、なんとかして、第二の申命記史家たちは辻褄を合わせようとしたのです。

他方において、それ以前の箇所にも王国滅亡後の視点から、加筆が加えられ、カナン之地も、ダビデ王朝も、エルサレム神殿も、決して無条件で永遠の存続が保証されているわけではなく、ヤハウェへの不服従の場合には約束が取り消され、それが罰として失われる可能性が警告されていたことにされるわけです。歴史的には、ユダ王国の滅亡とともに、カナン之地の所有も、ダビデ王朝も、そしてエルサレム神殿、これらが一気に失われました。しかし、その時代に生きた第二の申命記史家たちによれば、神に背教すれば、それらすべてが失われることが予告され、予め警告されていた、ということになるのです。だから、それらの賜物が失われたのは、そのような警告に聞き従わなかったイスラエルの側の責任なのだ、ということになります。

例えば約束の地カナンの土地の所有については、カナン征服が終わったときに、その征服の指導者であるヨシュア自身によって、こう警告されていた。ヨシュア記 23 章で、ヨシュアが人々に遺言をします。この、遺言という形式そのものが、実はモーセの遺言である申命記をまねたもののなのです。「わたしは今、この世のすべての者がたどるべき道を行こうとしている。あなたたちは心を尽くし、魂を尽くして」——注目して下さい、この文体。典型的な申命記的文体です——「わきまえ知らねばならない。あなたたちの神、主があなたたちに約束されたすべての良いことは、何一つたがうことはなかった。何一つたがうことなく、すべてあなたたちに実現した」。しかし、「主が約束された良いことがすべて、あなたたちに実現したように、主はまた、あらゆる災いをあなたたちにくだして、主があなたたちに与えられたこの良い土地からあなたたちを滅ぼされる」。土地喪失の警告ですね。「もし、あなたたちの神、主が命じられた契約を破り、他の神々に従い、仕え、これにひれ伏すなら、主の怒りが燃え上がり、あなたたちは与えられた良い土地から、速やかに滅び去る」(ヨシュ 23:14-16)。もちろんこれは形の上では、ヨシュアがカナン征服の直後に語ったことにされていますが、文体を見ていただければわかるように、実際には申命記以後の時代に、第二の申命記史家たちが書いている。そして、第二の申命記史家たち自身が、土地が失われたのは神の無力ではなく、責任は「あなたたち」にある、「あなたたち」が「与えられた良い土地からすみやかに滅ぼされる」のは、契約を破り、他の神々に仕えたからなのだ、と説明しているのです。

では王国が滅びてしまうのは何故か。王政導入を指導したのは預言者サムエルでした。サムエル記上 12 章では、その王政導入の責任者であるサムエル自身が、やはり警告を発したことになっています。「今、見よ、あなたたちが求め、選んだ王がここにいる。主はあなたたちに王をお与えになる。」——これは王国建国の際のサムエルの演説です——「だから、あなたたちが主を畏れ、主に仕え、御声に聞き従い、主の御命令に背かず、」——これも申命記的文体ですね——「あなたたちもあなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならそれでよい」。つまり、神に忠実であれば、王国への神の恵みが期待できる。「しかし、もし主の御声に聞き従わず、主の御命令に背くなら、主の御手は、あなたたちの

先祖に下ったように、あなたたちにも下る」。具体的には、「主はあなたたちもあなたたちの王も滅ぼし去られる」ということです(サム上12:13-15, 25)。だから、王国が滅びるのもやはり、神への不服従、契約違反、神の戒めを破ったことの結果であると、予め伏線の形で警告されていた。しかも、王国成立のその瞬間に。それが実現したのが王国滅亡なのだ、ということなのです。このようにして、王国滅亡も、神自身の正しい裁きとして正当化されるわけです。

それでは、ナタンの預言にあったように、ダビデ王朝は永遠ではないのか。先ほど見ましたように、ダビデのソロモンに対する遺言では、律法を守れということが命じられていますよね。「モーセの律法に記されているとおり、主の掟と戒めと法と定めを守れ。そうすれば、あなたは何を行っても、どこに向かっても、良い成果を上げることができる」(王上2:3)。しかも、ダビデによれば、ヤハウェはこう約束してくれという。「もし、あなたの子孫が自分の歩む道に留意し、まことをもって、心を尽くし、魂を尽くして(お分かりでしょうが、これまた申命記の文体です!)わたしの道を歩むなら、イスラエルの王座につく者が断たれることはない」。「もし、……歩むなら」(!)。ここでは、ダビデ王朝の存続に、条件がついているのです。「心を尽くし、魂を尽くしてわたしの道を歩むなら」、ダビデの王朝は永遠に続く。しかしそれはあくまで、「もし……なら」という条件を伴うのです。同じような条件付きの王朝の永続の約束は、他の箇所にもあるのです。

エルサレム神殿の完成直後に、神殿を建設したソロモンに対して神が警告を発するところですね。ここにも王朝存続の約束があります。でも、ここでもそれはあくまで条件付きなのです。「もし、あなたが……掟と法を守るなら、あなたの父ダビデに、『イスラエルの王座につく者が断たれることはない』と約束したとおり、わたしはイスラエルを支配するあなたの王座をとこしえに存続させる」(王上9:4-5)。しかし、守らなかったらどうなるか。「もしあなたたちとその子孫がわたしに背を向けて離れ去り、わたしが授けた戒めと掟を守らず、他の神々のもとに行って仕え、それにひれ伏すなら、わたしは与えた土地からイスラエルを断ち、わたしの名のために聖別した神殿もわたしの前から捨て去る」(同9:6-7)。すなわち、神殿も国家も王朝も滅びるだろう、ということです。

このように、第二の申命記史家たちは、カナンの土地の所有も、王国の存立も、ダビデ王朝の断絶も、エルサレム神殿の喪失も、すべて王たちや人々の罪によるものとするのです。バビロン捕囚時代の破局が、これらの警告の成就であると意味付けられることにより、それらは決して、自分たちの神ヤハウェの敗北や無力を示すものではなく、逆にこの神の歴史における力を示すものであり、王や民の罪への罰であることを証明するということになります。たいへんな自虐史観であるとも言えます。しかし、自虐史観の形をとりますが、神の力を信じ続けるという意味での、信仰の危機の克服に大いに資するものであったと考えられるわけです。

最後にですが、第二の申命記史家たちはこのように、破局の原因を解明するだけではなく、それではこれからどうすればよいのか、という助言もちゃんとしていることを付け加えておきたいと思います。王国滅亡、捕囚という危機的状況の中で、何をなすべきか、ということを提言しているのです。

その例として一つだけ挙げますと、列王記上8章46節以下で、ソロモンがエルサレム神殿を完成して、それを神に奉獻したときに、神に長い祈りをささげているのですね。そこでは、罪を犯して捕囚になった場合に、ヤハウェに立ち帰りの祈りをするように勧告されている。「もし彼らがあなたに向かって罪を犯し、―― 罪を犯さない者は一人もいません―― あなたが怒って彼らを敵の手に渡し、遠くあるいは近くの敵地に捕虜として引いて行かれたときに、彼らが捕虜になっている地で自らを省み、その捕らわれの地であなたに立ち帰って憐れみを乞い、『わたしたちは罪を犯しました。不正を行い、悪に染まりました』と言い、あなたに立ち帰り、あなたが先祖にお与えになった地、あなたがお選びになった都、御名のためにわたしが建てた神殿の方に向かってあなたに祈るなら、あなたはお住まいである天にいましてその祈りと願いに耳を傾け、裁きを行ってください」（王上8：46-49）。

ここでは明らかに、国家の滅亡と捕囚が前提になっています。そして、そこで人々がなすべきことを、いわば神への執り成しの形で述べている。これは明らかに、捕囚時代の申命記史家たち、私の言う第二の申命記史家たちが、捕囚にある人々に呼び掛けている言葉と読めるわけです。い

たずらに神の力を疑ったり、あるいは他の神々、勝利者であるバビロニアの神々に心を移したりするのではなく、あくまでヤハウェに立ち帰り、その赦しを乞いなさい、自分たちの罪を悔いなさい。こういうふうに助言している。第二の申命記史家たちの勧告は、やはりソロモンの祈りにあるように、ヤハウェへの立ち帰りと悔い改めへの呼びかけであるわけです。ヤハウェへの信頼と帰依を保つべきことを、人々に呼びかけているのだろう。

そして実際に、ユダヤの人々が、王国滅亡、捕囚という存亡の危機を乗り越え、その後もユダヤ人として信仰を保つことができたのは、やはりこういう歴史家たちの呼びかけが力を与えたからではないか、そういうふうに私は考えております。

そういうわけで、今日のお話では、申命記史書とは何かについてお話ししたうえで、それをヨシヤ王時代の宗教改革と、王国滅亡後の捕囚時代の状況に結び付けて、それぞれの時代に関わる二つの編集層に分けて、申命記史書の歴史観についてお話しいたしました。そして旧約聖書のこの歴史書が、いつ、どのような状況下で、何のために書かれたのか、ということを考えてみた次第であります。ご静聴ありがとうございます。

(付記：本稿は2015年7月4日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講演会を文章化したものです。)